「えゝ歸りますわ！」彼女はキッと言つた。

「そりやいけない……」彼は蒼くなつて言つた。「一體お前は何しに來たんだい？……何故接吻したんだい？」

ネルリは謎のやうに笑つた。

「お別れに來たんですよ、もう出掛けなくちやならないから……」

「何處へ行くんだい？」ミハイロフは絶望的に言つた。

「アルブーゾフの所へさ。」ネルリは復讐の情に燃えて居た。「それから……新聞を貴方に聞かせたかつたんですの……ようくおきゝなさい。そりや屹度初耳よ。」彼女は語勢を強めて行つた。そして相手を焦燥す事の快感を十分味ふために、一寸言葉を切つた。

「どんな新聞だい？　何が初耳なんだい？」ミハイロフは疑はしげに訊返した。

ネルリは落着き拂つて、彼から眼を放さずに言つた。

「それは……貴方のリーザが……今日身投げした事です。」

ミハイロフはたぢ〳〵とした。彼は不可解な霧に包まれたやうな氣がした。たゞミルクのやうな霧の中に、復讐に燃えた二つの黑い眼が光つてゐるのを見た。

ネルリは身を翻へして部屋を出て行つた。彼女は入口の階段の上に立つて、何かに耳を傾けてゐたが、頭を抱えると、急に灯の明滅してゐる街の方へ走つて行つた。

二六

アルブーゾフはネルリの部屋に彼女を待つてゐた。

卓子の上には一本の蠟燭が朧ろについてゐた。黄い椅子や、抽斗や、白い夜具に蔽はれたネルリの小さな寢臺やが、その中に浮出てゐた。部屋の中は男のそれのやうに何の濡ひもなかつた。それが却つて苦行者の嚴肅さを思はせて、熱情や、失戀や、姙娠や、早産やを經驗した若い女の胸中の苦悶を雄辯に物語つて居た。

アルブーゾフは全く酒氣がなかつた。そして一つの事を考へ續ける事の怖ろしさに時々頭を振つてゐた。彼は自分が何の爲に此處に居るかゞ解らなかつた。彼は時々自分を嘲けるやうに苦笑した。

扉が開いて、ネルリが入つて來た。

「やつと歸つて來たね。」アルブーゾフは不氣味に笑ひながら言つた。

ネルリはアルブーゾフには氣も止めないで帽子や外套を脱いだ。そして部屋の眞中

に立つてゐて、獨言のやうに言つた。

「あゝ、片付いた！」

「片が付いたのかい？」彼は疑はし氣に言つた。

ネルリは眉を顰めた。そして何も答へなかつた。

「まアいゝさ……併しネルリ！　きいてお呉れ……俺は此處にかうして坐つてゐる間中考へてゐたのだが……俺にはどうも信じられないんだよ……お前は彼奴の所へ悲劇を報告に行つたのぢやあるまい？……お前は彼奴を愛してゐるんだ……知つてゐるとも……お前は彼奴を愛してゐるんだ……女は、初めて身を委せた男の事は一生忘れないものだつて云ふぢやないか。どんなに憎み、どんなに呪ひ、假令殺さうと思つてゐても、男が指先でチョイと招けば、女は直ぐ跪く……

…どうだつたい？　悲壯な別離だつたらうね？」アルブーゾフは病的な微笑を頰に浮べながら言つた。

「そりや悲壯でしたわ！」ネルリは復讐するやうにキツパリ言つた。

「それが冗談な事は判つてるよ。」彼は蔑むやうに笑ひながら言つた。「お前は態と冗談らしく言つてるが、それは實際だつたんだ。分つてるさ……お別れに身を委せて來たのだらう？　最後の抱擁をね……」

「無論ですわ！」ネルリは挑戰するやうに答へた。

アルブーゾフは彼女に跳び掛らないばかりに憤激した。彼の頭腦は混亂した。彼が故意に毒舌を吐いてゐる事も、自分の猜疑や嘲弄は徒らに彼女を怒らせ、自分自身すらこんな言葉に堪えかねてゐる事も知つてゐた。併し實際に曾てミハイロフに身を委

せた事のある女の口から、假令それが買言葉であるにもせよ、こんな事を聞かされるのは彼にとつて堪えられない苦痛であつた。

「ネルリ！　俺を苦しめないでおくれ！」彼は唸るやうに言つた。「俺は信じない……お前が故意に言つてる事を俺は知つてゐる……分つてるとも……けど俺は聞いちやゐられないんだ、聞いちやゐられないんだ！」

ネルリは笑ひ出して男に近づいた。

「もうお止しなさいな！　俺の愛してゐるのは貴方ばかりだわ！　可愛い、……可哀さうな……」彼女はアルブーゾフの頭を抱へて、亂れた髪を撫でながら、自分の胸に抱き締めて了つた。

狂氣のやうな幸福が彼の咽喉を締めた。彼はネルリの小さな胸に寄り添うて動かな

かつた。心臓の鼓動が聞える。彼は呟いた。

「俺は苦しんだ……苦しかつた……何しに行つたんだい？」

ネルリは彼を突き退けた。そして叫んだ。

「あゝ厭だ……辛い！　私もうつくづく厭！　ザーハル・マキシムヴィッチ！　貴方は何時まで私を苦しめるの？　片が付いたと言つたら私を信用したらいゝぢやありませんか！　そんな事が何で證據立てられます？　私は貴方に申し譯のない事をしました。併し私は貴方に許しを乞ひませんでした。跪く事が出來ませんでした。けども、それをしたつて、何になるんでせう？　貴方は何時になつたつて忘れやしません。憶えてゐるでせう？　何時か私を赦すとおつしやましたね。そして少時してから私の咽喉を締めましたね……今日はまた何しにいらつしたの？　白狀なさい！　私の流產を知つ

たからこそなんでせう？……何が許しです？　何が愛です？　貴方はいつも詰らない事ばかり思ひ出します、私は接吻しませんでした、優しい言葉を掛けませんでした。私がする事なす事に貴方は……あの人にもこんな風に接吻し、こんな風に優しくしたんだらうと思ふに違ひないんですもの……さうでせう？　眞個でせう？　無論さうですとも！　昨夜私は寢臺にねてゐて、その時程貴方を戀しく思つた事はありませんでしたわ、若し貴方が此處にゐて下さつたらと……そして私は、私はあの人を愛してゐるんだ。私の靈も肉も、全てあの人のものだ、あの人を勞らはう、あの人に從はう！　さう思つたのです。けれども私は胸を燃やせば燃やす程、自分のして來た事が判然浮んで來るのです……私怖ろしくて……尤もでせう？　さうぢやありませんか？」

「尤もだ」アルブーゾフは低い聲で言つた。「けどお前は餘り露骨過ぎるよ。こんな風

に接吻したらう、こんな風に愛撫したらうつて……それぢや俺はどうすればいゝんだい？　綺麗に別れて了つて、もう會はない氣かい？」

「さうです。」ネルリは力なく言つた。

「若し俺にそれが出來なかつたら？」

「そんな氣がするだけなんです、私が貴方のものでないから、そんな氣がするだけなんです。一度身を委せれば、直ぐ出來る事なんです。何と仰しやつても、どうお思ひになつても貴方の求めてゐらつしやるのは、それだけです。」彼女は痛みと憎しみとを含んだ聲で、ヒステリカルに言つた。

「聞いておくれ。」アルブーゾフは徐ろに言つた。「お前の言ふのは眞個かも知れない。俺には忘れられない。思ひ出しもしやうさ、考へもしやうさ。併し俺は自分の心を殘

らずお前の前にさらけ出してゐるんだ。あの男が俺位にお前を愛してゐたのなら、いや、お前を捨てゝも、その過失に苦しんでゐるとでも云ふのなら、そりや俺だつて忘れもしやうさ。けど事實はさうぢやないんだ。俺はお前に殘りなく自分を投出してゐる。俺にとつてはお前は神聖な物だ。それにあの男は、お前を使ひ古した雑巾か何ぞのやうに捨てゝ顧みない。……私の役割はどんな所なんだい？　三人が若し出會つたら、あの男は思ふだらう、馬鹿な奴だ、俺の散々慰んだお古に、全生涯を捧げてやがる！……俺は堪らないんだ。そんな時になつたら、俺はあの男を殺すだらう、お前を殺すだらう、そして自殺して了ふだらうよ……」

アルブーゾフは頭を抱えて、堪え難い苦痛に體を震はした。彼は不意に帽子を掴んで扉口の方へ進んだが、急に立止つて言つた。

「ネルリ！　これだけは憶えておいておくれ！　俺はお前を愛してゐた、今も愛してゐる、何時までも愛するだらう。併しお前はあの男を愛してゐるんだ。分つてゐるさ。そればかりは俺を欺けないよ。俺もあの男の事を忘れたのだと思つても、頭はいつか横に振つてゐる……信じられるもんか……言つて呉れ、眞個の事を言つて呉れ！　何しに行つたんだい？　お別れにぢやあるまいね？　最後の思ひ出に、絶望かどうかを確かめに行つたんだらうね？　彼奴は思ひ直したかい？　燒棒杭にならうとは言はなかつたのかい？　止めて呉れ、嘘を言ふのは止して呉れ！　たつた一遍でいゝ、眞個の事を言つて呉れ！　お前はあの男に別離の接吻をしたらうね？……」

アルブーゾフの聲は途絶えた。彼はネルリの返事を待つてゐた。併しネルリは何も言はなかつた。彼女は白い手を胸に當てゝ、跪かうとしてなし得ない者のやうに泣きくづれた。アルブーゾフは悲しげに頭を振つた。

「左樣なら！　もう來まいよ、少くともあの男が生きてゐる限りはね……左樣なら！」

彼は力まかせに扉を蹴飛ばして、闇の中へ跳んで行つた。扉は壁に當つて家中に鳴り渡るやうな音を立てゝ閉つた。

ネルリは彼が再び戻つて來る事を願ふやうに、凝乎と扉を見詰めてゐた。蒼白い頰には涙が止め度なく流れた。胸に當てゝ居た手は何時の間にか力なく垂れ下つてゐた。

二七

街中は震駭した。

騎兵少尉クラウゼを葬つたその翌日、會計官ルイスコフは縊死を遂げた。彼は會計長の譴責に反抗した爲に役所を罷めさせられたのである。更にその翌日には商人ツレグロヴの娘リーザが溺死した噂が傳つた。と同時に八百屋が郊外で短銃自殺を遂げた報知も傳つた。

一發の銃聲が眠れる街の靜寂を破つた事は今迄にもあつた事だ。併し有らゆる階級を戰ふた自殺の傳染は全市を動搖せしめた。風説や流言は果てしがなかつた。そして今度ばかりは好奇心以外のものがあつた。

郊外の八百屋の自殺は人の話題には餘り上らなかつた。それも大抵は市場のもの丶間であつた。彼は酷い酒飲みで、泥醉した彼の顏には死の影が漂ふて居た。前の晩彼は酒屋で大聲を上げてゐた。我と我が胸を打つたり、ある人を呪つたりした。けれど

もそんな事は勞働者の常として、誰も泥醉した狂人に注意を拂ふものはなかつた。

ルイスコフの自殺はあらゆる人を呆然とさした。これ程の勇氣と、これ程の悲劇的な最後を、會計官の上に期待する者は誰もなかつた。彼の死は直ぐクラウゼの死の影響であるとされた。騎兵少尉の盛大な葬儀は、感傷的な人間に同じ道程を踏ましめるものだと論じた。一種の流行病であると言ふものもあつた。更に十八人の者が遠からず死ぬと云ふ、馬鹿らしい風説さへ傳つた。彼等は氣遣し氣にナウーモフの名を口にした。彼は此地に居溜らなくて逃亡したと云ふ者があつた。そして是等不安な動搖は大多數の人が馬鹿らしい豫言として嘲笑してゐたが、心の中では限りなく騷ぎ立てゝゐた。

分けても動搖の甚しかつたのは若い人々の間であつた。中學生達は盛にそれ等を論

議し、中にはナウーモフ主義を主張する者さへあつた。

女學生は花束を持つてクラウゼやリーザの墓を訪れた。併し哀れなルイスコフの夢は實現されなかつた。彼の葬式には誰も參列しなかつた。勿論葬曲の喇叭も響かず、一齊射撃も行はれなかつた。僧侶さへその姿を見せないで、母親が一人淋しく彼の屍を葬つた。チーシュは一人彼の墓を訪れたが、面白くもなささうな顔をして歸つて行つた。

中學校では校長が朝の祈禱の後に、自殺の罪を訓戒するやうになつた。青年の親達は刄物や短銃を隠した。

有らゆる人が血を沸かせた。有らゆる人が胸を騒がせた。彼等は近隣を驅け廻つて互に驚いたり、驚かされたりした。不安は募つた。數百年を費した一大建築物が崩潰

して、今にも人類の屍が續々と積み重ねられるやうに思へた。街は丁度奇妙な熱病に罹つたやうで、一人としてその本體を知る者はなかつた。

二八

將校になつて、妻を娶つてから以後、幾百度となく繰返して來た事をツレーネフ大尉は今日も繰返すのであつた。

何がそんなに妻を怒らせたのか、ツレーネフ大尉には譯が判らない。けれども、客が歸つて、ガタンと扉が閉つて了ふと、何かしら妻の氣嫌を取らねばならぬやうに思へる。彼は今の客が如何に浮氣女であるかと云ふ事、ミハイロフの悪口を言つては居

たが、あの女だつて或る野遊を催した日に森の中でミハイロフと關係したのだ等と云ふ事を話して、親しく妻と言葉を交さうとした。けれども妻は一ト言も返事をしないで、食堂へ入つて了つた。そして素知らぬ顔をして本を取り上げた。彼は妻に近づいて何とか仲直りの言ひ譯をしやうとしたが、相憎小間使が居たのでそれも出來ない。彼は全身の神經を震はしながら部屋の中を歩き出した。

「今日はグッスリ寢たよ、カーチヤ！」日常の平凡な事を言つて紛らさうと彼は思つた。「お前今日は何處へも行かなかつたのかい？」

併し妻は返事もしない、本から眼を放さうともしない。彼は、ぐづ〳〵食器を片づけてゐる小間使が、何と云ふ事なく腹立しかつた。殴り殺してさへやりたかつた。彼女が出て行つてからも此腹立が妙に彼を拘泥らせた。妻は薔薇色の腕を露はに見せて、

依然として默つて居る。彼はその腕に跳付いて行つて接吻する事を考へながら、矢張り默々として部屋の中を歩き續けてゐた。

「考へてもみなよ、カーチヤ！」彼は心に囁いた。「事の始まりは實に詰らん事からぢやないか。みんな話の行きがゝりさ。あの場合あんな風にでも言はなくちや、夫としての俺の顔が立たないぢやないか……」

彼は妻や客の口から、リーザの死を聞いたのだ。彼はそれを可哀想だと言つた。それが女を怒らせた最初だつた。彼は此頃街を騒がせて居る多くの自殺事件に對して、そんなに深くは考へてみなかつた。人間にとつて軍人より他に生きがひのある生活がないとまで思つて居る彼には、下級官吏のルイスコフが生活難の爲に死ぬ事は寧ろ當然な位であつた。名も知らぬ八百屋の死は言ふまでもない事である。クラウゼの自殺

は流石に彼の胸を騒がしたが、それとても、彼は單純な人間であつたのだと云ふ人々の意見に苦もなく同意して了つた。併し無邪氣な眼をした、金髪の美しい小女のリーザが自殺しなければならぬ理由は、ツレーネフ大尉にとつては不可解であると同時に可哀想な話であつた。

彼は漫ろに人生の無常と云ふやうなものを感じ初めた。單調な自分の生活を思ひ、譯の解らぬ妻の日毎の嫉妬騒ぎや、それから受ける心の壓迫やを思ふと、自分だつて今直ぐにでも短銃を額に當てかねない氣がした。そして話が會々ナウーモフの哲學に落ちた時、自分を愚弄しやうとしてゐる二人の女を前にして、噴嚏腰になつて彼は叫んだ。

「妻が何だ！　子が何だ！　生活は妻子ばかりで充實されるものぢやないんだ！」

そしてこれが到頭收集し難い程に妻を怒らせてしまつたのである。

何うして自分は恁麼にも妻を腫物のやうに思はねばならぬか、一寸でも妻の愛撫に接すると、どうしてあんなにも妻の侮辱を忘れ去るのか譯が解らない。妻は散々自分と口論しておきながら、今はもう素知らぬ顔で本を讀んで居る。自分だつて彼女の氣紛れなんかに拘泥するものか――彼は唾液を呑み込み〳〵、悶えたり、血を沸かしたり、妻を憎んだり、戀しく思つたりしながら、何時までも部屋の中を歩き續けた。彼は何時か卷煙草を手にして居た。刺戟性の煙草の一服は彼の心を落着けた。

「煙草は止して下さい、私は頭痛がするんですから。」突然、憎悪に燃えた妻の聲が響いた。

ツレーネフは身震ひして、煙草を口から放した。併し自尊心と激昂は、思ひも寄ら

ぬ事を口に言はせた。

「嘘つけ！　頭痛なんかするもんか。俺は煙草が吸ひたいんだ……何だつてそんな顰面をするんだ！」

妻は荒々しく立上つた。本を引摑んだまゝ夫には眼もくれずに出て行つた。彼は眼が眩んだ。彼は部屋中をよろめき廻つた。彼は狂人のやうに跳出した。そして寢室の扉を敲いた。

「お開け！　カーチヤ！　開けろつたら！」

「何か御用でございますか？」妻は化粧臺の傍に立つて居て、餘所々々しく言つた。

「御用だつて？……何故扉をしめたんだ？　何を怒つてるんだ？　一體全體何が何うしたつて言ふんだ？　何うして貰ひたいんだ？」

ツレーネフは圓々肥つた柔かい肩や、婀娜やかな髪飾やを見た。彼は力にまかせて張り倒したい程憎かつた。

「どうして貰ひたいんですよ？」鸚鵡返しに彼女は言つた。チラと彼の眼を見て、再び本を讀み出した。

突然ツレーネフは妻の手から本を奪つた。彼女は吃驚した。顏色は變つた。哀願するやうな苦しいやうな、妙な表情が顏面を走つて、消えた。彼女の眼は輕蔑と憎惡に燃えた。

「何するんです……返して下さい。」

併し本をシツカリ胸に抱いて震えて居る男の姿を見ると、少し可笑しくなつて、「馬鹿！」と心で怒鳴りながら、扉口の方へ歩いた。

それと同時にツレーネフは本を投出して、彼女の後を追つた。彼は急に絶望と悪夢のやうな快感を覺えて、思はず彼女の背中を殴り付けた。あッ！　と叫んで、彼女は虚空を掴みながら倒れた。濁つた霧のやうなものが彼の腦裡を過ぎた。彼は眞蒼な妻の顔を見た。眼は圓く飛出し、口腔は怖ろしく眞暗に開いて居た。殺したナ！と彼は思つた。

「カーチヤ！　カーチヤ！　赦してお呉れ！　赦して……」彼は愛情と、羞恥と、憐憫と絶望との堪え難い衝動を覺えて、倒れた妻の體軀を抱きかゝへた。

突然彼女は猫のやうに身を屈めた。眼は圓くて暗く、口からは唾液が流れた。彼女は默然と夫の眼の中を見詰めてゐたが、不意に彼の髪に獅嚙みついて、哀れつぽい金切聲を張上げながら、掻きむしつたり、身を藻掻いたり、嚙みついたりした。

ツレーネフは自分が發狂したのではないかと思つた。今度こそはもう取り返しがつくまいと思つた。全てが永久に終りを告げた事を知つた。彼は今に自分の手近に剃刀を見るに違ひないと思つた。そしてその剃刀を鏡臺の上に見出した。彼はそれを引掴んで、物狂はしく自分の咽喉を掻きむしつた。

「これでもか……これでもか……」彼は復讐でもする氣だつた。これがもう取り返へしのつかぬ事で、即ち死である事は判然意識して居た。

「カーチエチカ！　私は……カーチエチカ！」彼は斯う叫んだつもりだつたが、實際は只唸り聲を發するだけで、ドオと彼は床に倒れた。玩具や小箱や香水瓶が化粧臺から轉げ落ちた。どうして自分の眼の前に椅子の脚があるのか解らなかつた。彼は起上らうとして椅子の脚を掴んだが、血にむせて、再び床に倒れた。彼の眼は忽ち暗黄

色の闇に蔽はれた。

「カーチエチカー」彼は死の國から絶望的に叫んだ。その聲は併しもう生きた人間には聞えなかつた。

二九

部屋の中は森閑として居た。雨も風もやんだのだらう、戸外では物音一つしない。洋燈はぼんやり點つて、ミハイロフとアルブーゾフの影を壁にうつして居る。二人の間には少時話が途絶えて、凄慘な氣がその隙間に忍び込んだ。部屋の中には二人の影法師の他動くものもない。夜も更けた。靜寂は壁を透して流れ込む。

「何もかも打ちまけやうか。」少時してアルブーゾフが口を切つた。「君と話すのも多分これが最後だらう。今となつちや何も隱す事はないんだ。さうぢやないか、セリョージャー……僕は君を殺しに來たんだぜ……併しもう駄目だ。斯うやつて君の歸宅を待つてた間はやつつけられさうだつた……いきなり引掴んで……胸が騷ぐ、血が燃える……併しもう駄目だ……あの副官さへ殺して居なかつたら……セリョージャー　君にとつちや副官は命の恩人だぜ……」

アルブーゾフは中途半端な事が出來ない男だつた。悲觀したら苦行者にならう。慟いなら殺して了はふ。愛して居るなら死ぬまで愛しやう。ネルリの家を飛出した時、彼はミハイロフを犬のやうに殺さうと思つた。けれども彼はミハイロフを愛して居た。何故か知ら心底から憎めなかつた。

アルブーゾフは或る檢事の話を知つて居た。それは自分が何人からも相手にされなくなつたのを知つて、修道院に入つて苦行者となり、十七年間一歩も外に出ずに死んで行つたと云ふ事である。ネルリを失つた彼は、或る時修道院に入つて行つた。そして人間の生命が、歩いたり話したりする事の他に――即ち現在自分等の間に、重大なりとし、苦痛なりとし、必要なりとしてゐる事の他に、靈のみ單獨に生きて自己の世界を造り得る事を知つた。彼はその後飲酒に浸り、淫蕩に身を持ちくづして居たけれども、修道院の事は少しも念頭を去らなかつた。只彼は現在この世にネルリの生きてゐる事を忘れ去る事が出來なかつた。彼はミハイロフが死ねばいゝと思つた。誰かに殺されゝばいゝと願つた。そして終に自分で殺す事まで考へたのである。併しネルリが曾てはミハイロフに身を委せたのだと云ふ記憶は到底拭ふ事が出來なかつた。その純

潔と羞恥と恐怖との全部を捧げた處女には、最初の男は到底忘れる事が出來ないと云ふ事と、次の男は女にとつて、その愛撫の中に於いても常に最初の男と比較されてゐるのだと云ふ考へは、彼を救ひ難い苦痛に陷れた。そして彼は今、自殺か、修道院かの岐路に立つたのである。

「ぢや何うすりやいゝんだ？」ミハイロフにその心を指摘された時、彼は皮肉に問ふた。

「ネルリ？　ネルリが何うして自殺するんだ？」ミハイロフは叫んだ。

「そんなら彼女は何うすりやいゝんだ？」アルブーゾフは不氣味に怒鳴つた。「ダンスでも踊るのか？　それよりは自殺した方がましだらうよ。今頃はもう死んでるかも死れない。女の一人や二人死んだからつて、何を君は騒ぐんだ？」

「ザーハル！」ミハイロフはかう叫んだが、後の言葉が出なかつた。

リーザの死はミハイロフの心を痛めた。彼は彼の主義として、リーザの死をすら考へまいとした。リーザは自分を戀した。それに自分が報いやうと報いまいと、リーザは自分を戀して居たのだ。戀は女の心を欺く。彼女は少くともそれに幸福を感じてゐたのだ。戀がなくなつた時彼女は何の爲に生きてゐるんだ。その必要が何處にあるんだ。人間はどうせ早かれ晩かれ死に至るものだ。人類が不死のものであつて、リーザだけが死んだと云ふのなら氣の毒でもあらう。併しみんな死ぬのである。只彼女の死が少し先になつたと云ふ迄の事である。

彼は「生」を人間の最も怖るべき病だと考へてゐた。ペストも肺病も癲病も、何時かは癒る時がある、癒り得るものだ。併し人間の中の何人が「生」から脱れ得たか。

彼はこの事を悟つた時、その苦しさに堪えなかつた。そして救ひを藝術に求めた。併し彼の頭腦には直ぐレオナルド・ダ・ヴインチの言葉が浮んで來た。彼は「最後の晩餐」の變色したのを嘆いたと云ふ、その時にして繪畫は既に變化して居たのだ、百年の後には自分の作品は消滅して了ふであらうと。そしてそれはレオナルドの五十歳の時の話なのだ。ミハイロフはレオナルドの此考へを狂氣沙汰としか思はれなかつた。自分の體軀が今後二十年を經ずして腐つて了ふのだ。作品が二世紀の後消滅する位がなんであらう——

彼は生の痛苦に堪えなかつた。そして彼はその痛苦を刹那の快樂の中に忘れやうとした。彼は戀を求めた。「永遠の戀」を求めた。併しそれが二三年と何うして續き得やう。二三年は二三ケ月となり、二三ケ月は二三日となり、今では二三時間は愚か、二

三分とは續かなくなつて居た。全ての女が、同じ女句と、同じ仕草とを彼の前に繰返へす時、彼は徒らに幻滅を感じるばかりであつた。

リーザのやうに戀を有したものは幸福である。彼女が今後の幾十年かを生き永らへて、商人か官吏の妻となり、子を儲け、あらゆる人生の苦痛を經驗するよりも、現在溺死を遂げた方が遙かにいゝ方法だと思つた。併し彼は今となつて不思議に彼女の死が怖ろしくなつた。有らゆる人間に侮辱されながら死んで行つた無邪氣な少女は、彼の胸を突かずには居なかつた。リーザも一人の人間であると云ふ事を今迄は少しも考なかつたが、今にして彼はそれが明らかな事實として彼に迫つて來た。そして今またネルリが自殺しやうとしてゐるのである——彼は堪らなかつた。彼は死を欲した。それは自分の死か、ネルリの死か、アルブーゾフの死か、兎に角彼は死を欲した。

「ザーハルー」彼は叫んだ。「君は知つてゐるね？」

「何をよ？……」アルブーゾフは狼狽して不安げに訊いた。「君は何を言つてるんだ？氣でも狂つたのか？」

彼等の黑い影法師が大きく天井に動いた。

「僕は今日自殺しやうと思つたんだ、短銃自殺をね……僕が死んだら、喜ぶだらうね君は？」

「馬鹿な事を！」アルブーゾフは不明瞭に遮つた。「氣でも狂つたのか？」

「聞いて呉れ！」ミハイロフは顏を前方に突き出しながら言つた。

アルブーゾフは恐怖に襲れた。彼の顏は眞蒼になつた。

「聞いて呉れ！」ミハイロフは何事かを言はうとして、言葉を見出し得ないやうに言

つた。

アルブーゾフは思はず一歩退いた。

「聞いて呉れ！」また彼は繰返した。「君は……君は多分……眞個に僕を……」

「しつかりしろ！　何を言つてるんだ！」アルブーゾフは斯う叫んで、しつかりミハイロフの肩を摑んだ。併しミハイロフは物狂ほしくそれを振り拂つた。

「歸れ！」彼は荒々しく叫んだ。「歸れつたら！　さもないと打つ殺すぞ！　君は故意と來たんだ……僕が……君は僕が……解つたよ、解つたよ……解つてるとも！」

突然ミハイロフはづか〳〵と書室の奥へ歩いて行つた。そこらの物を床の上へ投げ出した。何かを小聲で呟きながら、顫える手は忙しげに机の抽斗を搔き廻してゐる。

「解つたよ……解つたよ……あゝ、解つたとも！」

アルブーゾフは身動きもせずに彼を見詰めてゐた。彼はミハイロフが發狂したと思つた。そしてミハイロフが今自分の眼の前で短銃自殺を遂げる事を知つた。騎兵少尉クラウゼの血に染んだ顔が眼に浮ぶ。ミハイロフの手を縛るのは今のうちだと思ふ。それでゐてそれを制する心が判然自分にも判る。

「解つたよ……解つたよ……」

ミハイロフはまだ抽斗を搔き廻してゐる。彼は抽斗の中の有らゆるものを床に投げ出した。アルブーゾフは連發短銃を卓子の上に見出した。それを取り上げるのは今だと思つた。けれども彼の體は動かなかつた。ミハイロフは到頭怒つて抽斗を床に敲きつけた。その時繪具皿が倒れて、短銃はその銃口を現した。

「セルゲイ！」アルブーゾフは甲高に叫んだが、急に振返ると、扉に胸を叩きつけな

がら部屋を飛出して行つた。

彼には何も解らなかつた。彼は狂人のやうに眼を見開き、眞蒼になつて、若し自分を追つかけて來る人の聲を聞いたら、直ぐ發狂するだらうと考へながら、無我夢中に街を走つて行つた。

三〇

夕方であつた。ネルリは一人寂しく自分の部屋に腰かけてゐた。

彼女はもうミハイロフの自殺を知つて居た。リーザの死に依つて亂心したのだと、今朝アルブーゾフから聞かされた。彼女はそれを聞いても少しも驚かなかつた。まる

で前から期待してゐた事のやうに冷靜な心を持してゐた。只何物かゞ胸から消え去つて自分が全く空虛になつた事を感じた。

彼女は全てを冷靜に判然させやうとした。彼女の手には短銃がなかつた。綠色の水底は何故か知ら好ましくなかつた。彼女は毒藥自殺を決心した。そして長い苦悶と醜態から逃れる藥を考へた。彼女はドクトル・アルノリヂイに會見を申込んだ。放心したドクトルの眼をかすめて、多くの藥品の中から適當なのを盜み取るのは手易い事だと思つた。そして夜の十時を約束したのである。

併し彼女は八時頃になつて、突然アルブーゾフの訪問を受けた。

「また來たよ……待つてゐて呉れたのぢやなかつたかい？」斯う言ひながら彼は近づいて來た。その時の喜びがどんなであつたか、彼女は自分で說明する事が出來ない。

多勝されれは死刑を宣告された人が、永久に再び會ふ事の出來ない愛人と、最後の會見を許された時に持つ感情であつたらう。

「ゾーリヤ！　ゾーリヤ！」そう悲しげに叫んで、彼女は男の方へ走り寄つた。

アルブーゾフは涙と愛と憐れみに溢れてゐる彼女の眼を見た。彼は帽子を投げ出して、倒れかゝつて來る女を胸に抱いた。嫉妬も、憎悪も、絶望も、ありとあらゆる忌はしい感情は消え去つて、歡喜と情慾と愛情の中に溶けて了つた。

「ネルリチカ！　俺のネルリチカ！」

彼は恰も子供でもあやすやうにネルリを抱き上げて、ゆすぶつて歩いた。

「到頭私のものになつて下すつたのね……眞個に私のものに……可愛いゝ……可哀想な私の……」

處女のやうな素肌が開き出された時も、彼女は恥しさうにもしなかつた。彼女は幸福に燃えた大きな眼を見開いて、男に獅嚙みついて來た。

……

總てが終りを告げた。彼があれ程あがき、あれ程彼の靈と肉體とを捉へ、その爲には何物の前にも躊躇しなかつた一事も終りを告げた。體軀は痛む。心臟は鼓動する。不可解な嫌惡の情は全身にこびりついて、何等の幸福も、何等の感激も、何等の情慾も殘らなかつた。

ネルリは寢臺に横はつて、艶氣のない髪は枕の上に亂れさせてゐる。幸福と疲勞に潤んだ眼は、羞恥もなく彼を見て居る。

「私の、私の……もう貴方は私のものですわね！」ネルリは言つた。「私の處にゐて下

さいね？　ね？　私もう貴方を何處へもやらないわよ！」

ネルリは起上つて、しなやかな二本の腕を差し伸べて、彼の頸をしつかり抱いた。額や顏や首や、有ゆる所に接吻した。滿されない情慾に捉はれた全身をすり寄せて來た。

アルブーゾフはもう女を見るさへ厭はしい氣がして居た。けれども彼は何物かに引づられて底もない谷へ眞逆樣に落込みはしないかと云ふ不安に襲はれた。絕望と悔恨と悲痛とは彼の頭腦を霧のやうなもので包んだ。耳鳴りがした。何か兎の叫聲のやうなものが聞える。彼は一刻も早く此處を逃れなければならぬと思つた。

「さうさ。併し俺は今日は工場へ行かなくちやならんのだ。知つてるだらう？　ナウーモフが居なくなつたからね！」

「工場？　工場なんかいゝぢやありませんか……いゝわ、私離さないから。」彼女は媚びるやうに命令した。

「いや、眞個なんだよ……都合が惡いんだから……またそのうちに來るよ。」

「何ですつて？　そのうちですつて？」

ネルリは彼の心の中をも見透すやうに大きく眼を見開いて、一歩一歩退りながら言つた。彼女は兩手で頭を抱えた。そして急に枕に顏を沈めて了つた。

アルブーゾフは彼女の方へ走り寄らうとした。併し彼は動く事が出來なかつた。萬事がもうお終ひだと思つた。彼は足下の床が何處か下の方へぐん〳〵落ちて行くやうに思つた。

少時して彼は盜人のやうに足を忍ばせて扉口に近よつたが、愚かしい笑ひを片頰に

浮べると、急に戸外へ跳出して行つた。

戸外には三頭馬車が待つてゐた。彼はそれに飛び乘つて、「やれツー」と命令した。

「何處へやります？」馭者が聞いた。

「何處へでも勝手にやれ！」

馭者は主人の氣が狂つたのだと思つた。そして馬に鞭を當てた。

三頭馬車は闇を突いて全速力で走つた。アルブーゾフは時々前へツンのめるやうにしながら坐つてゐた。「走れ〳〵。」そう心に叫んだ。

兎のやうなネルリの聲が訴へる。絶望的な眼が彼を睨む。今頃はネルリはもう自殺してゐるかも知れない。彼は自分で自分を破滅させた時に、ネルリをも同時に破滅させて了つたのだ。彼はミハイロフとネルリの重みに堪え難ねた。彼は本能的の恐怖に

襲はれた。

彼は一ト思ひに頭を射貫かうかとも思つた。併し彼にはそれが出來なかつた。けれどもこの儘性格を破産した男として生きてゐる事も出來なかつた。

「止れ！」彼は叫んだ。「右へ曲れ！　修道院へやるんだ！」

馬は再び闇の中を全速力で走り出した。

三一

街は眞暗だつた。冷たい風がひつきりなしに吹いて居た。

肥大なドクトル・アルノリヂイと、小さな大學生のチーシュは、腕を組みながら酒場

を出て來た。

チーシュはネルリが自殺未遂をやつた事を知つて居た。そして彼等の友人の誰彼がみんな自殺して行つた事に就いて、何となく孤獨を感じてゐた。併し彼は狂技師の主義に同感する事は出來なかつた。科學や藝術やが有らゆる價値を失つて、最後の一線にまで行き詰つてゐる現在の社會に取つては、ナウーモフの主義も眞理かも知れぬ。けれども、光榮ある未來の人類にまで死のヴェールを投げかける權利はない。現在既に勞働階級の人々が生活の舞臺に跳り出やうとしてゐる。そしてその旗には『全人類の幸福』と書かれてゐる。其處からは新らしい科學も、新らしい藝術も生れねばならない――チーシュは歡喜に滿ちた群衆の聲を聞いた。風に翻る赤い旗を見た。後は活氣を帶びて、勝誇つたやうに歩いた。

「ドクトル！　貴方は死人だ。それきりの人間だ。ね！　さうぢやありませんか。そしてこの街も、死の街だ。御覽なさい！　闇に雨に泥濘に……往來はまるで活氣がないし……何處に生きた人間が居るんです？　何處に人道があるんです？　貴方と私と……無益なドクドル・アルノリヂイと、大學生のチーシュと……何の事だ。貴方は死人でさア。只それだけの人間でさア。貴方は生きながら腐敗して行くんだ。もういゝ加減墓へ入る時ですよ。何故つて、ドクトル、貴方はもうぷん〳〵匂つてるぢやありませんか。生きながら惡臭を放つてゐる。空氣を汚すばかりだ！　これが生と言はれやうか。ドクトル！　僕はもう死ぬ！　金もない、煙草もない、そしてこんなにぐでんぐでんに醉拂つて……僕はもう死ぬやうな氣がしてならぬ。僕は死ぬ。醉拂つてゐる。死んで了ふ。それでも僕は信じてゐるんだ。ドクトル！　僕は信じてゐますぜ！　人

道を、民衆を、下層社會を！　萬國の勞働者よ、團結せよ……僕は貧亡人さ。僕は何人にも不必要な乞食のチーシュさ……乞食のチーシュだが、僕は信じる。未來を信じる！　未來は民衆のものだ。……古き世界を燒き拂ひ……ドクトル！　歌はう！　古き世界を燒き拂ひさ……歌はうつたら、ドクトル！」

服に見えぬ合唱隊の指揮でもするやうに、チーシュはドクトルの腕から脫け出して怪しげな足踏みをしながら、到頭兩足を踏み外して、泥濘の中に坐つて了つた。そして彼は急に泣き出した。

三二

嚴寒と降雪を思はせるやうな、暗い秋の日であつた。寒い風が荒廢した花園の裸になつた樹々の枝から、最後まで踏み止つて居た黃葉を地に振り落して居る。道路の泥濘は凍つて、鋼鐵のやうに堅い轍の路の亂れた所で、小さな埃が渦を卷いてゐる。空は低く垂れ下つて、眼に立たぬやうな粉雪が空中にちらついてゐる。

小さな大學生は自分の寢臺に腰掛けて、ぼんやり床の一點を見詰めて居た。其處には女の髮の絡んだ髮針が一本落ちてゐた。眼は暗く、額には旋毛が亂れて、彼は病み衰へたシーシュ(鵐鳥)のやうであつた。

彼が兎に角人間と認めて交際してゐた者が、今一人として殘つて居ないことを思つた。彼は、蒼褪めた多くの屍の間を歩いてゐる自分の姿を見た。彼は何物かを信じてゐた。そして苦しんだり熱したりした。今でもそれは信じてゐる。苦痛や哀傷を覺え

ながら、信じてゐる。併し彼は全てが破滅するものである事は、遠から知つてゐたのだ。只自分を胡魔化してゐたのだ。併しもう何れは入るべき墓穴の側で、徒らに身を藻掻いてゐる自分が滑稽になつた。彼は疲勞した。藻掻く事を止めた。そして無意義な生活や、でぶ〳〵肥えた愚かな下宿の主婦との見苦しい關係や、泥醉や、痴愚の中につる〳〵と身を墮して行つた。そして彼の胸には、死んで了ひたいやうな絶望の他何物もなかつた。

「生は偉大なものだと自分は信じてゐる。併しそれは自分一人のためにあるのぢやないのだ。幸福な人々は生きてゐるがいゝ。やがては美はしい社會の地平線が、君等の眼の前に近づくだらう……僕は戰つた、信じた、憧憬れた。併しもう僕のなすべき事は終つた。僕の力は盡きたのだ。僕の力は足りなかつたのだ。僕はもう墜落して、そ

こから這ひ上る事も出來ない。併し僕は、僕がこんなになつてゐる事を思出しても呉れない未來の人の爲に、喜んで祝福を贈らう！」

時は經つて行つた。闇は大地を蔽ふた。併しチーシュは矢張り坐り込んでゐた。彼はもう何も考へなかつた。たゞ死のやうな手頼りない絶望の中に、頭ごと沈んで行くやうな氣がした。主婦は度々彼を起しに來た。けれども彼は決して扉を明けてやらなかつた。彼は終夜坐り續けてゐた。

風は物凄い音を立てゝ、雪を窓硝子に敲きつけて居た。夜中になつてそれは本降りとなつて居た。

青白い微光が蒼褪めた眼で恐る〳〵部屋の中を覗く頃、雪は靜まつて居た。地面は雪で蔽はれた。全てのものは眞白に、滑かに、清らかになつてゐた。花園の樹は白衣

を着てジッと立つて居た。チーシユの部屋は森閑して居た。壁は冷たい眼を据えて部屋中を見下して居た。物怖ろしい靜寂が其處にも漲つてゐた。

小さな大學生は短かい外套と並んで、帽子掛けに首を縊つて居た。破れた一足の上靴があたりの床に落ちて居た。

大正十二年十二月十日印刷
大正十二年十二月十八日發行

最後の一線
定價金七拾錢

著作者　佐伯伸吉
發行者　東京市神田區淡神保町十番地　福岡益雄
印刷者　東京市牛込區早稲田鶴巻町四〇三番地　谷口熊之助
印刷所　東京市牛込區早稲田鶴巻町四〇三番地　金星堂印刷部

不許複製

發行所　東京市神田區表神保町十番地　上方屋出版部
振替東京二六三六番
電話神田四三八五三一番

Kgh
14

終

◆近代名著物語叢書◆

1 ドストイエフスキイ・虐げられし人人・中村白葉
2 ゾ　ラ・ナ　ナ・笹村茂
3 モウパツサン・女の一生・北川劉吉
4 トルストイ・闇の力・力石平三
5 アルツィバアセア・最後の一線・佐伯伸吉
6 ドストイエフスキイ・罪と罰・北川劉吉
7 ダンヌノチヨ・死の勝利・力石平三
8 トルストイ・復活・小島鐵
9 ゾ　ラ・巴里・笹村茂
10 アルツィバアセフ・サニン・佐伯伸吉
11 ドストイエフスキイ・カラマゾフ兄弟・北川劉吉
12 ゾ　ラ・金・笹村茂
13 トルストイ・戰爭と平和・小島鐵
14 ユーゴー・レ・ミゼラブル・田中義雄
15 デユーマ・モント・クリスト・田中義雄
16 イブセン・海の夫人・山路疎水
17 メレヂユコフスキイ・神々の死・保高德藏
18 ロマン・ローラン・ジャン・クリストフ・未定
19 シエンキヰッチ・何處へ行く・未定
20 トルストイ・アンナ・カレニナ・田中義雄

◆ 定價一部金七十錢送料六錢
書名を朱書せる分に限り 金一圓二十錢 ◆